

岩塚 一恵さん

Kazue Iwatsuka

この秋、StudioGOO では初めての試み、アートエキジションを開催します。作家は岩塚一恵さん。彼女の仕事を何か一言で名づけるのは難しく、表現手段も変遷していきます。しかしながら空気感と時間を紡いで世界を創りあげる「核」はそこにあり続けます。この機会に一度じっくり彼女の中を覗かせていただきたいと思います、インタビューを試みました。（インタビュー：StudioGOO 吉福 敦子）

始まりは建築から…

—岩塚さんの作家としてのヒストリーからお伺いします。建築からスタートされたんですね。最初に建築に興味を持ったきっかけは何かあったのでしょうか？

岩塚（以下、岩）ものを創ることに興味があると思っていて、なるべく、いろいろなものを含んだ分野をやりたいという、ちょっと欲張りな願望がありました。そこで建築を作る事ができれば、その中に入るものも全部自分で作れるんじゃないかと。それが高校生の時です。枠組みとしての建築を網羅すれば、その中から自分のやりたいものを後からセレクトしていくことも可能だろうという、まあ、ちょっと甘い考え（笑）。

—面白い発想ですよ。とりあえず建築があれば中にあるものは何でもあり。

岩 例えば、建築が作れば、家具が作りたくなったら作れるはずとか。なにか、そういう飛躍した考え方をしていた



ました。

—なるほど。で、実際にやってみてはどうでしたか？

岩 早い段階で、ちょっと違ったかもしれないというのを、うすうす感じましたが、まだ行けるまだ行けると、結構長引かせて関わっていました。その中で「建築」と一言と言っても、様々なタイプの建築があり、様々なスタイルの関わり方があることもわかったので、長く粘ってこの場所に関わり続けた結果、結局、今やっていることに繋がっているかな、と思います。

音と光、身に纏う空気へ

—最初に見たのが、Pepper's Gallery^{(*)1}での膜のような薄布での作品でした。パオのようなかたちのもので、構造物ではありますが、建築というよりも、美術に近いと思いました。あの中で人が暮らすことはあまり想定していないというか。

岩 そうですね。人が暮らすということは、あの時期は全然考えていませんでした。空間の中に人がいて、その周りに空気が漂っている。洋服でもなく、構造物でもなく、その間にとどまっている、何かゼリーのように固まっているモヤモヤしたものがすごく気になっていました。それを何を媒体にして表現にしたらよいのか、まだ迷っていた時期でした。

—その時に、「音」に出会いました。音が作り出す、ある程度自分や誰かの周り、近くの空気。その頃はずっと「気配」とか「身に纏う空気」とか表現していたのですが、それを実際に体験してもらった時に、音と光を使ったらどうだろうか、と考えたのがあの作品です。

—そのように発想が変わっていったのには、何かきっかけがあったのですか？

岩 単純に建築だと、図面を引いた後に模型を作って、小さいサイズの模型を覗き込んで「あーだ」「こーだ」という風にやるんです。しかし、私はその状況が想像できなくて。模型は百分の1くらいのサイズで作るのですが、自分が百分の1くらいのサイズになってその中に立っていた時

*1 SOUNDING SCAPE #2 2005年 / Pepper's Gallery、東京 / 薄膜、ミクストメディア

岩塚一恵

建築、芸術学を学んだ後、都市環境や場を俯瞰する視点を持ち、サウンドスケープに関する調査研究を開始する。

サウンドスケープ・デザインに携わる傍ら、自らの調査結果を『SOUNDING SCAPE』（2005年）として調査論文とインスタレーションにより発表する。以降、音環境から視点を広げ、場や街、都市が持つ記憶の風景（気配）と自身の記憶（既視感）を主なテーマに創作活動を行う。電子音響やコンテンポラリーダンスとの共作も多く発表する。

<http://kazueiwatsuka.web.fc2.com/>

に、そこから何が聴えて、どんな匂いがしてとか、どんな音が聴こえてというのが、ちょっとわからないなあと思ったりして、もどかしさがあったのは憶えています。

一番最後に建築模型らしい模型を作ったのは、大学の2年生か3年生のはじめあたりが最後です。その時のテーマはもう音を聴く為の空間というコンセプトだったと思います。建築物として壁や床らしきものはあるのですが、音が回遊するような仕組みでした。人の気配はなんとなく伝わり、音はもっとはっきり伝わるという、視覚的な意匠よりは、聴覚的な情報をテーマに作ったのですが、それが中々伝わらなくて。周囲の人に、模型の「ここではこういう音が聴こえて、ここに人の気配が音でこう伝わるんだ」と言っても、模型なので「実際はそうならないんじゃないか」とか、いろいろ言われて。あーなんかもどかしいな、と思ったのは憶えています。そこで、どうしようかな、と思っていたのが学生の頃です。

—そこから、すっぱり自分の興味のある空間とか匂いとか時間が纏わりついてくる、といったそういう方向に一気に？

岩 結構長い冬がありましたね。

図書館に引きこもって色々な本を片っ端から読んでいた時に、音コーナーが少しだけあって、そこで「世界の調律」という本を見つけました。それがサウンドスケープに関する本だったんです。結構面白くて。あ、こういう風に考えたら、今までやってきたこともすんなり落とせるな。うあっ！となった時に、一気にボルテージが上がって、闇雲にサウンドスケープについて調べたりしたことがありました。そうしたら日本でもサウンドスケープデザインに関わる人が何人かいることがわかり、会って話を聞いたり現場に押し掛けたりしました。その影響もあって音の作品を創るようになった時期がありました。

人と会ってその人の声とか、身振りから発生する音を主題に考えて生活してみるとか。すごく変な癖ですが、そういうことを一時期どっぷりはまってやる時がありました。それが面白くて、刺激にもなった気がします。

サウンドスケープか否かと考えるのも不自然だな

—去年の「密度の…」シリーズとそその前の神戸ビエンナーレ^{(*)2}の作品を観ると、最近もう一段階ステージが変わったのかな、と思います。

岩 そこがターニングポイントだったのかどうかははっきりしていないのですが、ある時、サウンドスケープに縛られている、という風に思ってしまった。偏りすぎていくと、いろいろなバランスがちょっとおかしいなと感じて、ふっと止まる瞬間があるんです。そのバランスは人によって違うから、すごく均衡がとれている人もいれば、ある人から

みたらすごくアンバランスだけど、その人のなかでバランスがいいというものだと思います。多分、私は後者です。そして、ちょっとこのバランスはちがうな、と感じて。自分が創ったものがサウンドスケープか否か、みたいなことを考えるのがちょっと不自然だな、と思ってきました。考え方はすごく好きだけれど、一カ所に縛られていると、もうそこから一歩もでられなくなってしまいます。多分神戸の少し前ぐらいからそれを考えていたと思います。

—神戸は2011年の夏でしたか？

岩 そうですね。春から創っていたんですが、公開したのは秋。結構長い時間が与えられて、4月から10月までの間に公開制作をするという条件だったのですが、その年の3月に地震があったので、予定がずれ込みました。5月末頃から本格的に制作をする状況になったのですが、やはりまだまだ混乱していて。私は東京から関西に行ったり来たりを繰り返していたので、なにかその2つの場所の温度差を毎回感じていました。東京に戻ってくると、結構切迫した状態。だけど神戸に行くと、まったくそういうことがなくて違国みたいだったんですよね。あの時。その間を歩き来していて、ちょっとサウンドスケープのことだけを考えている場合じゃない、となってきたことも、間接的に後押しになったかと思います。

—なんでも震災に結びつけてしまうのは違うと思うのですが、あの時の東京の状況は被災地ではないけれど、異常事態だった気がします。ものを創ることは、否が応でも社会や環境が関わってくるので、そんなことも関係があるのかもしれないね。

岩 あの時は、元々違うテーマで応募していて、それでプランが通ったんですが、結局最後は全く違う物になりました。震災だけをもちろんテーマにしているわけではないのですが、その時のリアルタイムの自分が置かれている状況やその場所が抱えている状況と、自分の心理的状況を合わせて、あの時はすごく変化があったので、やはり作品も変わっていくなと、思いました。

肩書きはあまり言いたくない

—岩塚さんの魅力は、こだわった末にそれをあっさり捨てて、次に行くことができることだと思います。自分が何をしたいかを常に真摯にみつめ、それを求めている人なんだと感じます。

岩 そう言ってもらえるといいんですけど。ちょっと飽きっぽいというのもあるかもしれないですね(笑)。

私が美術家と言われると、それも怪しいなあと思っていて、いつも困るんです。「何なにの何なにです」という紹介の頭書きを自分であまり言えないし、言いたくないというのがあります。この先どうなるかわからないですし、この前まで違ったしというのもあったりして、特に名刺にも

書いていないです。もうここ5、6年ずっとなので、多分これからもそうだろうな、と思います。

その時創った作品については「これは現代美術」この時創ったものは「建築」と言えたら、身分を変えられたらいいのに、いつも思います。

一本当は肩書きなんていないんだけど、世の中って肩書きという定義づけがないと落ち着かない人たちがいますよね。わからないものは、ドキドキよりも不安があるのだと思います。

岩 匿名でものを人に見せるということは、かなり高度なものを求められるというか、ごまかせないものがあります。だから本当は自分の首をしめているんだと思います。しかし、内輪だけで評価されたり、美術に関わる人しか感想を言えないというのは…。どんな人に何を言ってもらっても、平に並べて聴ける様な環境がいいな、と思ったりします。

一時よりも美術は開かれているし、美術館もカフェと同じような感覚で行けるようになっていっていると思うんですけども、こちらが身構えると観る人も構えちゃうじゃないですか。とても豪華な額縁に飾ってある絵を観る緊張感と、地べたに立てかけてある額縁のない絵を観る感覚というか、何かそのくらいの違いです。その辺にごろんって置いてあったら近寄って観て、もしかしたら触れてしまうかもしれないし、壊してしまうかもしれない、ぐらいのことが起きたらいいなという、そうした願望があります。

観に来る人と作品の関係に興味があります

—最近、岩塚さんが興味のあることをお話いただけますか？

岩 yahiro8の「密度イメージ」^(*)3)を創った時は、何人かとディスカッションをしたり、同じ街を歩いたり、グループ展みたいなことをやったあとに、それぞれが同一のテーマに対する回答をしていく感じで始まりました。今までは、自分で考えて、その展示をする日までになんとかつじつまをあわせるという、創りながら考えているような状態でした。しかし、人とのやり取りをすることが最近多くて。最初にプランを出して、それから周りにいる人たちと話しをして創っていくと、その過程で今までと違うことがおこってきていて、なんだかそうした影響がけっこう効いてくるなあ、というのを感じています。そうしたことを少し続けてやってみたいです。ダンスと関わる機会も何回かあって、観る人と踊る人では違うし、それをまた外から観る人がいるという状況がすごく面白いなと思っています。このあいだ「密度の感触」^(*)4)の展示で、最初予定はなかったの

ですが、展示空間の中でパフォーマンスをする時間を3時間くらいもうけたんです。その中に偶然観に来た人が一緒に同居して、最初気づかないくらいだけれど、観てると「どうも踊っているんじゃないか」と。説明も全然なくて微妙な感じなんですけれど、「どうもこの人は作品を観に来ている人と違うかもしれない」という絶妙な距離がすごく面白くて。なんだか美術の展示とも、ダンス公演とも違って、観に来た人と作品とパフォーマンスと一緒にいて、心理的にはだいぶ遠いんですけど、距離感としては近いところにいる、面白いなと思ったんです。そういうことをちゃんと何回か継続して、いろいろなパターンでやってみて、自分の中でどういうものがやりたいのか、というのをみていきたいんです。

見に来る人と作品の関係が一番興味があるのですかね。舞台だとある一定の方向から見るのが多く、距離感がありますが、私の場合は作品の中までずーっと入ってこられるというのをやりたいと思います。その中にもうちょっと違う意味で「人」がいたり、作品と人が関わる状況が創られる、そんなことをやってみたいですね。

—岩塚さんが創る空間は「ここで踊ってみたい」とそぞろれます。ダンスと空間は密接で、それは踊る側も観る側も「体験」として重要です。空間の中に、空気感があって時間があって。そこに違う時間が流れている感じがするからかもしれません。

岩 今の話を聞いていてなんでなのかなと、考えていました。例えば、絵画とか彫刻を創る場合は、ほぼ正面性があって、この角度から見てもらいたいとか、このディティールを、とかがあるのだと思うのですが、私はそういう感覚が全然ない。全てをどこから見てもいいし、創っている時も自分はあっちこっち動いているので、正面がありません。だから観る人も必然的に中に入っていくと、あっち側が見えないみたいなことが起こっています。そうして移動しているうちに、歩いているだけだと鑑賞なんですけれど、ちょっとステップを踏めばダンスのための空間になっていくかもしれないし、またちょっと違うことをしたいな、と思えばそれがもしかしたら舞台ばくもなっていく。あと、自分も創っている時に作品の中を動き回っていることが、けもの道じゃないですが、そういうものを創っているのかもしれないな、と思います。

*2 神戸ビエンナーレ2011 高架下アートプロジェクト『鼓動』2011.10.1-11.23 /古電球、古鍵、塩、シャーレ、ガラス、鏡、水

*3 密度のイメージ 多重風景 -yahiro-vol.4 / yahiro8、東京2013.2.20-24 /古時計、古道具、古着、ナトリウムランプ、昼光ランプ、遮光フィルム、残糸、アルコール、香水

*4 密度の感触 :LandscapeVX / Pepper's Gallery、東京2013.5.13-18 /古時計、古道具、古着、ナトリウムランプ、昼光ランプ、豆電球、遮光フィルム、残糸、アルコール、香水

—岩塚さんの作品は「鑑賞する」というより「体験」しているのだと思います。「体験すること」によって、日常と非日常がくると反転するような気がします。自分の日常の中に非日常がいつの間にか、すっと忍び込んでくる。忍び込まれた人は、その非日常を家まで持って帰ってしまうのだと思います。少しだけ違うスライドした世界。例えば微妙に1秒が遅いとか。

岩 気づくとだいたいずれてるみたいな？人よりちょっとペースが遅いな、というのは思っています。だいたい作品の中で流れる時間は遅くて、ひどい時にはスローモーションか、残像になっちゃうくらい。普段から時間をゆっくり流せたら、と思っているので、その願望がでているのかもかもしれません。

時間と空間の化学反応の「体験」

—今回 StudioGOO でエキジビションをやっていただきますが、そこで今、目論んでいることをお話いただけますか。

岩 今回も「体験型」でやりたいな、と思っています。演者というか、作品の中に「もの」と同じ様に「人」が存在していて、その人たち自身もずーっと作品を体験している。その人たちが創り出す時間と、私が物理的に配置したものや創ったものが作り出す時間が掛け合わさった時にどんな感じになるのかな、というのが見たいことです。

さらに、その中に見る人が入り込んできた時に、化学反応がおきるかおきかないかという接点もおもしろいな、と思っています。いくつかの並行する考え方と時間が同じ空間に存在していて、それがどこかの瞬間でぴたっと合うかもしれないし、合いそうであわないで、ちょっとずつずれてずっといくのかもしれない。そういう時間と空間の両方があわさった現象が、どうなるのかなど。そういうことがやってみたいです。

いつもそうなんですけど、「見方」を聞かれることがあります。中に入っているのかとか。どこまで入っているのかというのは、一番迷うことらしいです。説明をしなくても、回遊してもらうことを引き出せるような、奥までずずっと行って、あっち側から見たいな、と思ってもらえたり、あそこで何が起きているんだらうと気になったり、そういうものができたらいいです。

壊れることは悲しいことではない

—今回、「エクリチュール」^(*5)をテキストにすると同っています。そこから、何を抽出していくのが楽しみです。

岩 あの本は最初からこういう内容だってわかっているんでなくて、自分の持っている本の中から、訴えかけてきていたので、みかねて今回はこれだと決めました。テキストは今までやったことがないので初挑戦のことです。

本には作者がいるので、他人の考え方や、そこから何か影響を受けるんじゃないか、ということを考えながら本を手にとったのですが、思いのほか難解です。

同じことが起こっていても、他の人からみたら全然違うとか、平行世界がいくつもあるような感触を受けて、そこにいろいろな日常生活をしている中でその状況が落とし込めると面白いな、と思いながら読んでいます。例えば同じことを伝えたいんだけど、言い方が違ったり、表現が違ったり。何かそういうパラレルに動いていて少しずつずれている世界がどこかで一緒になるような瞬間が割れたらいいな、と思っているんです。

「零度のエクリチュール」も読んだのですが、今は「エクリチュールと差異」の方を読んでいます。いろいろなものが壊れていく、でも壊れていく一方で創られて行くような状況。そのような状況がいくつも起きていて、でもそのタイミングが違うと全然違うことになる。それを一度に観られるような状況というか。

「壊れて創られていく」は普遍的なテーマで、昔から言われているようなことですが、何故かはまってしまいました。壊れるということは別に悲しいことではないと思っていて、壊れると人はもう一度創ろうと思うし、壊れた破片がすごくキレイなモノだったりするかもしれない。起こっている現象を様々な角度から観れるような状況があるんじゃないか、ということ、本のあらすじとは少し別筋ですが思い浮かべています。

岩 もうひとつ「脱構築」というキーワードが浮かんできています。その言葉をちゃんと解釈せずに、使っていた時期もあったのですが、それについていろいろ読んだり考えるうちに、今考えていることに近いなのを感じました。壊れていく一方でどんどん生成されていくという、そのイメージがじっくりくると思っています。

—楽しみ!

岩 私はまだ楽しみまでいっていませんけど(笑)。不安(笑)。やったことがないことやるというのは結構多いのですが、毎回不安で。もう絶対完成にはいたらないって。

多分、知らないものに飛び込む癖があるのだと思います。痛い目にあうんですけど、なにかそれも含めて楽しいと思っちゃう。痛い目に合うんだよね。なんでこんなところに～みたいな。やんなきゃよかったのにな(笑)。

(2013年9月21日 StudioGOOにて)

*5 ロラン・バルト「零度のエクリチュール」、ジャック・デリダ「エクリチュールと差異」

岩塚一恵 Solo Exhibition 「白の遊戯」
—《白》への憧憬と虚無の感覚—

2013年11月17日(日)～24日(日) (※20日(水))
土日13:00～18:00 / 平日15:00～20:00 会場 StudioGOO

